

子ども学の

ひろば

お便り

POST

◇ 読者から ◇

日本保育学会第 68 回大会 (in 名古屋) に行ってきました。

初参加で多くの刺激をもらいました。特に、学会企画のシンポジウム「質の高い保育は実現できるのか」の中で、できる・できないという成果主義的な立場ではなく、能動的な学び手＝子どもの主体性の尊重という立場をとり、子どもの遊びの質をしっかりと見とっていく重要性が話されていました。これは、小学校教育でも共通するものだと思います。改めて、教師の専門性が問われていると思いました。(T)

学会企画シンポジウム「質の高い保育は実現できるのか」で、神戸大学の北野幸子先生が発言された「二項対立的構図からの脱却」という言葉に刺激を受けました。その言葉と、その後参加をした自主シンポジウムで語られた「二人称的かかわりの構図」が関連性を持って私の中で結び付き、今も心の中で響き合っています。(I)

実行委員会企画シンポジウム「生命観を軸とした保育のパラダイム」での森岡正博先生(哲学者、早稲田大学教授)の講演に感銘を受けました。人間が一つのからだとして「まろごと」生成していくという権利に、人間のいのちの尊厳を見いだそうとするお話は、保育とのつながりを感じるとともに、保育の世界の奥深さと切実さを改めて実感する機会となりました。(N)

絵本の紹介

『てんじつき さわるえほん ぐりとぐら』

中川李枝子 作/大村百合子 絵
福音館書店 2013年

読んで楽しい『ぐりとぐら』は触ってもっと面白い。樹脂インクの透明な凹凸を、目で確認してさらに面白い。1963年に出版されたご存じ「ぐりとぐら」の誕生50周年記念に出されたのが、このてんじつき(点字付き) さわる絵本です。

目を閉じて、指先に神経を集中させて絵本を読んでもみると、いろいろな手触りを感じます。点字を読めない者にとっては点字であることが辛うじてわかるブツブツ。ぐりを表す赤色の帽子や服のストライプ。ぐらを表す青色の帽子や服のドット模様。また、森で見つけた大きな卵、大きなフライパン、そして、読み手の誰もが憧れるふわふわのカステラ、とそれぞれ特徴的な手触りに作られています。それらに触れるワクワク感の一方で、形状や大きさを触れることによって認識する難しさを改めて感じます。そして、「見えない世界」というよりも「視力に頼らない世界」を生きる人たちの空間認識や知覚の深さ・豊かさを想像して、いたく驚嘆したりするのです。

(KT)

お茶大子ども学ブックレットの紹介

お茶の水女子大学ECCELL企画のシンポジウム、フォーラム、特別講義などを記録した冊子です。

Vol.6 第8回お茶大ECCELL子ども学シンポジウム
「鼎談『子ども・戦争・歴史』」(H26.11.21 開催)

【本田和子・宮澤康人・山本秀行】

Vol.7 第6回お茶大保育フォーラム

「認定こども園の今とこれから」(H27.3.15開催)

【講演者：無藤隆・渡辺英則】

実費(1冊500円+送料)にてお分けします。ご希望の方は、下記までお問い合わせください。

ECCELL 事務局 nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp